

『海が言葉をくれた日』

大歳倫弘

この恋がもう叶わないと気づき、行先も決めず電車に飛び乗った。ドア付近にもたれ外を眺めていると突然、窓いっぱいに光輝く海が現れ、そのあまりの美しさに心の痛みは大粒の涙となってポロポロとこぼれ落ちていった。

読んでいた小説にそんな一節があって、私は驚いて顔を上げた。そこは瀬戸内の海沿いを走る列車の中で、小説の場所と同じだったからだ。だが今見えているのは満員の車内と、どこか苛立った空気、そして日常として横たわる海だけだ。いつか見たいと思った海が、見栄えよく表現されたいつもの海と知りなんだか冷めてしまった私は、クライマックスにも関わらずその小説を閉じてしまった。

夕方。帰りの列車が同じ場所に差し掛かると、突然停車した。前方を走る車両にトラブルがあったらしい。誰かの舌打ちが聞こえ、空気がびんと張りつめたときだった。静まりかえった車内にシャッター音が響きわたり、乗客たちは一斉にスマホが向いた先を見る。

そこには、夕暮れの名残の茜色と忍び寄る夜の深い紺色が混じり合った空と、そんなグラデーシオンを受けとめ淡く瞬く海。そして海峡を跨ぎ、大きくそびえ立つ吊り橋のシルエットがあつて、私たちをそつと見守るように佇んでいた。シャッター音は連鎖するように広がっていく。俯いている人はもういない、少し開いた窓から波の音が聞こえ、ゆつくりと車内を満たしていく。

「どうだ」

いつもの海にそう言われた気がして、私は心の中で謝った。

「ごめんなやこ」。

いつもの海がいつかの海を追い抜くと電車は再びゆつくりと動き出す。皆がスマホをしまつ中、私はカバンから、もう一度小説を取り出した。言葉を交わした海を友のような目で見つめながら。